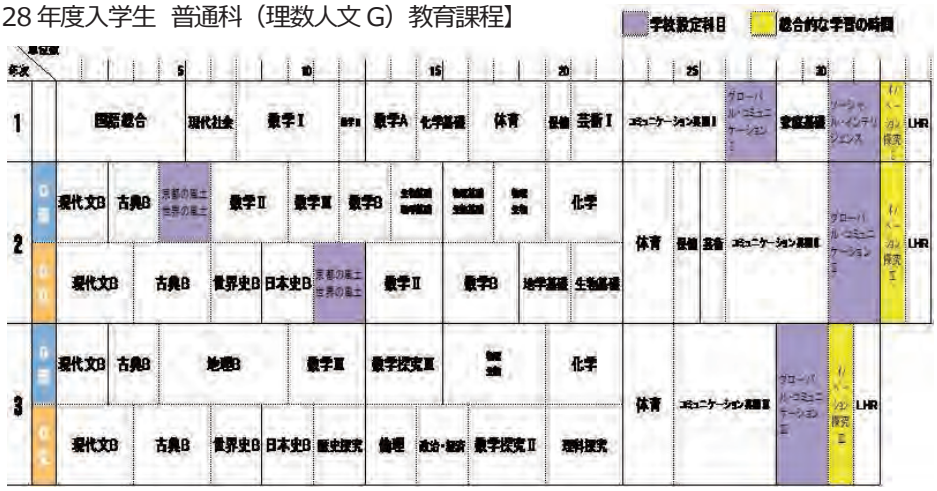
京都府立鳥羽高等学校

ソーシャル・イノベーションで挑む グローバル・リーダーの育成

【構想の概要】

リベラルアーツ教育を基軸に、国内外の学術機関や企業等と連携した鳥羽の学びネットワークを活用して、グローバル・イシューに挑む新しい価値創造を目指す課題研究「ソーシャル・イノベーション」により、価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力を備えたグローバル・リーダーを育成する教育システムを研究開発する。

【平成 27･28 年度入学生　普通科（理数人文 G）教育課程】



【平成 30 年度ＳＧＨ対象生徒数】

第１・２学年 640 名（普通科、グローバル科）、第３学年 124 名（普通科）　　[全校生徒 960 名]

ＳＧＨ研究開発概要

京都府立鳥羽高等学校は、明治 33 年創立の京都府第二中学の歴史を受け継ぎ、文武両道・質実剛健の校風を持っている。平成 27 年度から普通科を対象にＳＧＨ研究開発を開始し、価値創造力・協働力・突破力・寛容力・教養力の 5 つの力を備えたグローバル・リーダーの育成を目的とし、総合的な学習の時間「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」を核とした教育課程を研究開発している。平成 29 年度に専門学科「グローバル科」を開設した。

教育課程表、時間割上の工夫

1・2 年次の「イノベーション探究ⅠⅡ」については、隔週で行われる土曜授業において 2 時間連続の授業を行い、まとまった課題研究の時間を確保している。また、土曜日を活用しながら、高大連携による探究活動を実施している。

3 年次の「イノベーション探究Ⅲ」については、英語論文の作成が主な活動となることから、ＳＧＨ対象 3 クラスの生徒がＩＣＴ機器を効率的に活用するために平日に授業実施している。

また、各学年 1 単位の「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」における課題研究を効果的に行うために、学年ごとに探究のプロセスにのっとった教科横断的な学校設定科目を設置している。特に、外国語の習得及び活用については、課題研究内容との関連を重視した取組を行っている。

学校設定科目、学校設定教科「グローバル」

1 年次の「グローバル・コミュニケーションⅠ」においては、『京の智』を英語で発信することを目的とした英語プレゼンテーション、「ソーシャル・インテリジェンス」においては、課題研究内容に関連づけ、数学の統計的手法を踏まえたＩＣＴ機器を用いたデータ分析の手法を学んでいる。

2 年次の「グローバル・コミュニケーションⅡ」においては、課題研究で扱うグローバル・イシューをテーマとした英語ディベートをとおした批判的思考力の育成、「京都の風土・世界の風土」においては、伝統・文化領域の課題研究と関連させつつ異なる地域の関係性を見いだす力の育成に取り組んでいる。

3 年次の「グローバル・コミュニケーションⅢ」においては、アカデミック・ライティングに取り組み、英語論文作成に必要な表現や構成等を学んでいる。また、平成 29 年度に開設した「グローバル科」においては、「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」を核にして、専門教科「英語」、第 2 外国語（中国語、韓国語、フランス語）、古典Ｇや化学Ｇ等の学校設定教科「グローバル」を含む教育課程を編成し、これまでのＳＧＨの取組をさらに発展させている。

「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」・指導上の工夫

1 年次「イノベーション探究Ⅰ」においては、伝統・文化領域に関する課題研究とおして「京の智」の再発見に取り組むとともに、課題発見能力を高める等アカデミック・スキルの向上に取り組んでいる。

2 年次「イノベーション探究Ⅱ」においては、伝統・文化、サイエンス、地域研究の 3 領域に分かれ、価値観の対立が起こるグローバル・イシューについてグループ協働による課題研究を行っている。

3 年次「イノベーション探究Ⅲ」においては、2 年次に行った課題研究内容に関する英語論文を作成するとともに、7 月に行われる鳥羽グローバル・サミットにおいて、シンガポール国立大学や上海の復旦大学の学生、京都大学等の留学生と協働し、課題解決に向けた提言を英語で発表している。

指導上の工夫の 1 例として、高大連携をとおした独自教材の開発がある。仮説を立てる力の育成に焦点化した「リサーチクエスチョン」の手法を用いた独自教材を、大阪大学や京都光華女子大学とともに開発中である。当初に立てた仮説に対して 6 つの問いを立て、その問いについてグループ協働でリサーチを行い、その仮説自体が適切かを複数回検討し、

＜「イノベーション探究Ⅱ」課題研究発表会＞

新たな仮説を立てる。仮説の質を高めることにより、以後の課題研究を効果的に行うことを目指している。また、この教材の各章に応じたルーブリック評価表を日本語・英語で作成し、11 月に行う「イノベーション探究Ⅱ」課題研究発表会等において国内外の参観者・ＴＡからフィードバックを受け、3 学期以降の日本語・英語論文作成へとつなげている。

各教科への広がり、教科間の連携

「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」等で研究開発しているアクティブ・ラーニングを軸とした指導法を各教科へ普及するために、学校設定科目・教科に加えて、他の科目においてもアクティブ・ラーニングをテーマとした公開・研究授業を年 2 回実施している。

教科間の連携を効果的に行うために、異なる教科・分掌の担当者による毎週 1 時間の「グローバル・リーダー育成推進グループ会議」を行い、研究開発の進捗状況、成果や課題を共有している。

また、「イノベーション探究ⅠⅡ」と学校設定科目・教科の両方を教える教員を増やすとともに、数学と情報の教科横断的な科目である「ソーシャル・インテリジェンス」では数学科と情報科の教員がティーム・ティーチングを行う等、円滑な教科間連携を行う工夫をしている。

学校体制としては、全教職員でＳＧＨの役割を分担する 1 人 1 役ＳＧＨを推進している。その結果、4 点満点のＳＧＨ事業に関する教職員アンケートの平均が平成 27 年度（研究開発 1 年次）の 1.8 から平成 29 年度（研究開発 3 年次）の 3.2 へ上昇するなど、ＳＧＨの取組が学校全体に広がっている。

ＳＧＨ海外研修、海外インターンシップ

ＳＧＨ海外研修を韓国・ソウル、中国・上海、台湾、全生徒対象の海外研修をシンガポールと上海で実施している。ハンヨン高校（韓国）との伝統家屋の保存問題に関する協働研究、國立台湾大学やシンガポール国立大学等と高大連携による課題研究、自治体国際化協会ソウル事務所でのプレゼンテーションやＪＥＴＲＯ（日本貿易振興機構）上海でのインタビュー調査など、「イノベーション探究」における課題研究内容と研修先の特徴を踏まえた海外研修プログラムを研究開発している。

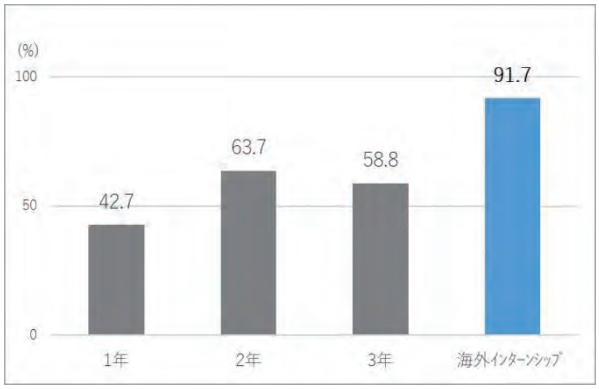
また、京都に本社を置くグローバル企業等と連携し、グローバル社会で働く資質向上を目的とした海外インターンシップを行っている。株式会社片岡製作所、株式会社堀場製作所、村田機械株式会社、オムロン株式会社等に御協力いただいている。

事前学習として株式会社片岡製作所の京都本社においてインターンシップを行い、代表取締役社長の片岡宏二氏からグローバル社会で働く上で大切なマインド・セットについて学ぶとともに、工場内でその基幹技術であるレーザー技術等について学ぶ。

海外におけるインターンシップのプログラム内容は現地社員と共同で作成する。例えば、上海では日本と異なる商習慣、シンガポールでは多文化協働力の重要性、韓国・台湾では日本・京都の技術の現地活用など、実際に海外の現地で働く上で必要とされる資質を向上させる上で、効果的なインターンシップ内容を共同開発している。

＜オムロン上海インターンシップ＞

平成 29 年度の海外インターンシップ参加生徒の変容については、帰国後の質問「海外で働くことや国際的な仕事への関心が高まった」について 91.7% が肯定的に回答するなど（資料 1）、同内容に関する全 1 年生の 42.7%、全 2 年生の 63.7%、全 3 年生



＜資料１：海外で働くことや国際的仕事への関心が高まった生徒＞

の 58.8% よりも高い結果となり、海外インターンシップがグローバルなキャリア観の育成に結びつく取組となっていることがわかった。

国内における企業連携

国内においても、グローバル・リーダーに必要な教養力等の育成を目的とした企業連携を進めている。

株式会社松栄堂と連携し、国語総合において、日本における「香文化」や「香」の歴史をひもときながら、古典文学の中の「香」の役割を考察させる授業を行っている。生徒は言葉だけでなく文化的背景や歴史を多角的に知ることが古典文学につながることについて理解が深まっている。

また、株式会社岡墨光堂と連携し、日本史Ｂにおいて、国宝「鳥獣人物戯画」の修復方法を学ばせ、その歴史的価値について考えさせる授業を行っている。生徒は歴史的文化遺産の保存と修復方法を知ることをとおし、伝統技術の継承と価値を未来へ遺す意義を理解し、日本のみならず世界の文化遺産などを修復し継承することがグローバル社会に求められることを学んでいる。

高大社連携

ＳＧＨ事業において取り組んできた高大連携と企業等との連携をさらに発展させ、三者合同で行う高大社連携事業を推進している。

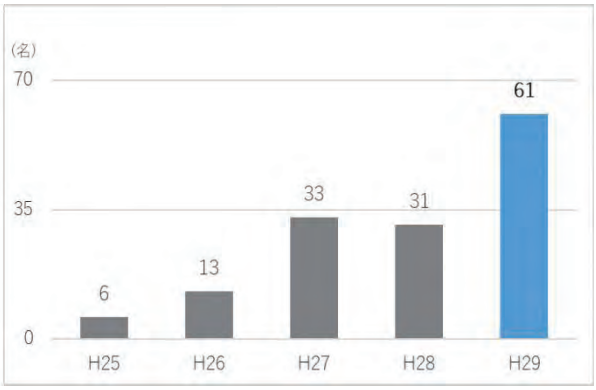
京都中小企業家同友会 2017 高大社連携研修事業では、キャリア教育の一環として、グローバルな視点から「働き方改革」や「学び方改革」についてディスカッションを行った。

成果と課題

目標設定シートの項目に関しては、ＳＧＨ指定前の平成 25 年度と平成 29 年度（研究開発 3 年次）を比較すると、「課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ数」が 0 回から 260 回へ、「自主的に留学又は海外研修に行く生徒数」が 6 名から 61 名に増加するなど（資料 2）、グローバル教育を目的とした企業連携等を推進するとともに、実際に海外に出て自主的・主体的に学ぶ生徒数が増加した。

研究開発中のカリキュラムの教育効果の検証については、本校独自の「仮説を検証するための指標」を用い、科目ごとの独自のルーブリック、生徒自身の相対的成長実感を問うアンケート、校内外からの授業評価、英語 4 技能の外部検定試験の結果等、様々なエビデンスを収集しつつ、多角的に検証している。

平成 30 年度（研究開発 4 年次）の課題はＳＧＨの取組の教材化である。これまで「イノベーション探究ⅠⅡⅢ」や学校設定科目等で個々に作成してきた教材を集積し、汎用性のある教材に改善したい。



＜資料 2：自主的に留学又は海外研修に行く生徒数＞

成果普及の取組

昨年度は本校主催のＳＧＨ事業研究発表会等に加え、外部機関が主催する第 15 回高大連携教育フォーラム等、合計 13 回の研究発表を行った。

管理機関である京都府教育委員会と連携し、グローバル教育を推進する京都府立高校 9 校からなる「グローバル・ネットワーク京都」交流会において課題研究の成果やＳＧＨの取組について発表した。

研究開発した教材や指導法をＳＧＨ校・ＳＧＨ以外の高校と共有する「ＳＧＨ教職員研修」、年 3 回発行のＴＯＢＡ ＳＧＨ ＮＥＷＳ、ホームページ更新（英語 74 回、日本語 115 回）等、多様な方法で研究開発の成果普及に取り組んでいる。